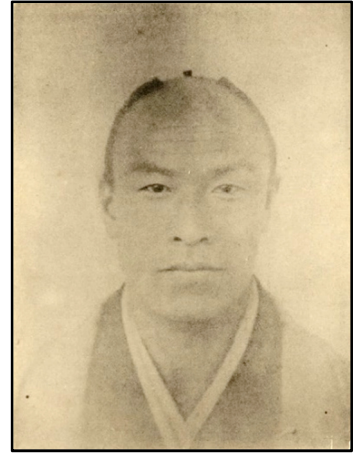


矢祭町ゆかりの偉人 吉岡良太夫 の生涯

大望を抱き 探訪の旅へ

吉岡良太夫(よしおかこんだゆう)は、江戸の天保元年(1830)2月26日、磐城国東白川郡中石井村(矢祭町大字中石井)の豪農鈴木家の次男に生まれ、幼名を**勇平**(ゆうへい)と名づけられました。

幼少から熱血多感、青雲の志を持つ勇平は、弘化2年(1846)、17才で故郷を離れ、学問武芸を学ぶべく会津から長崎など日本各地を巡り歩きます。探訪の末、文筆の才を身に着け、長崎奉行を務めていた旗本牧志摩守の**祐筆**(書記)となりました。



吉岡良太夫肖像

幕臣の道

のちに長崎から江戸に移った勇平は、御家人吉岡家の養子となります。名前も**吉岡勇平**(よしおかゆうへい)に変わり、数年後には養父の跡目を継ぎ、幕府の表御台所人として出します。

その後、旅の際に身に着けた地理学をもとに執筆した江戸湾防備策が認められ、当時、海防に従事していた代官**江川太郎左衛門**の下につき、海防事務取調役となります。安政6年には幕府が新たに海軍を創設するにあたり軍艦取調役を任されました。

日本初の太平洋横断任務

安政6年、幕府はアメリカと開港による日米修好通商条約を取り決め、条約の批准書(同意書)をアメリカのワシントンで交換することになりました。役割を担ったのが、新見豊前守(正興)を初めとした**遣米使節団**です。

使節団の一行は、アメリカの軍艦ポーハタン号に乗船し向かう計画でしたが、その護衛として、幕府の軍艦**咸臨丸**がサンフランシスコまで随行することになりました。



咸臨丸渡航図

乗員には、軍艦奉行の**木村摂津守**、艦長**勝麟太郎**(海舟)、通訳方の**中濱(ジョン)万次郎**など、海防に携わる幕臣達を中心に96人で構成され、勇平は**公用方(総務)**として渡米することになりました。乗組員の中には欧米の医学を学ぶために、木村の従者として乗り込んだ若い**福澤諭吉**の姿もありました。

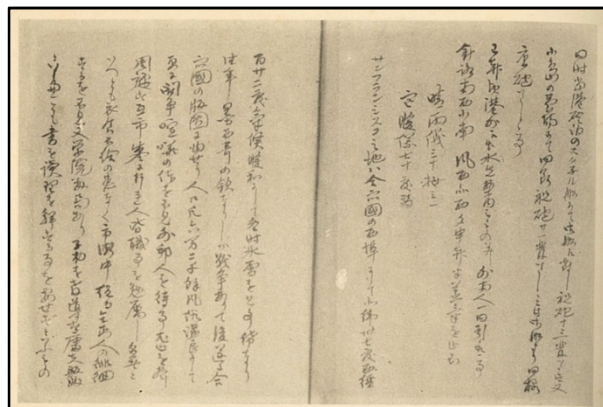
咸臨丸は安政7年、1月12日に品川を出港。荒波が続く太平洋をなんとか乗り越え、2月26日、37日間の航海を経てサンフランシスコにたどり

着きました。咸臨丸入港の13日後には、無事ポーハタン号も入港し、一同は再会を喜び合いました。公用の任務として日本人がアメリカに渡ることは、これが初めてのことであり、大任を果たした一同の感激は一入でした。

米国滞在中の任務

無事にアメリカに到着した咸臨丸でしたが、行きの大難航で、船の傷みは激しく、アメリカでの修理を終えたのが、入港から約2ヶ月後の5月8日のことでした。しかしこの間に航海中に病にかかった水夫達の療養時間に充てられたことが幸いとなりました。

公用方の勇平は、サンフランシスコに到着後、即座に重病人を市内の病院に入院させる手続きをし、手当をお願いしました。入院した船員のうち、療養の甲斐無く3名の乗組員が亡くなった後も、埋葬場所の準備、石材店で墓石の発注手続きなど、滞在中も自らの役目に取り組んでいました。



旅中の自筆「亜行日記」の一部

日本への帰還

役目を果たした咸臨丸一行は、帰路は嵐もなく順調に進み、5月6日品川沖に帰還します。無事に帰国した一同の感動と達成感とは裏腹に、わずか数ヶ月の間で日本の情勢は激変していました。桜田門外の変による大老井伊直弼の暗殺を機に攘夷論が急激に持ち上がり、幕府が目指す日本の開港とは形勢が逆転していたのです。アメリカの先進的な社会制度、風俗習慣などをこの目で見てきた勇平は、攘夷論に沸く時勢の移り変わりを嘆きましたが、情勢とはかかわりなく、幕府は咸臨丸一行に、任務の成功を称え賞を与えました。勇平30才の年でした。

任務の奔走と論策

不穏な動乱情勢の中にながらも、勇平は自らの役目を忠実に努め、幕臣としての経験を重ねていきます。

帰国後、勇平は名を吉岡“良太夫”（こんだゆう）に改めたのち、神奈川奉行所の支配定番役頭取を命じられ、江戸・神奈川間を守る任務にあたりました。課せられた任務の重大さを考え、講武所（武芸訓練機関）指南役、心形刀流の達人井丹羽軍兵衛に教を請い、自らの武術の鍛錬にも力を入れていました。慶応元年には新番役となり、その後は長崎奉行支配組頭、のちに大阪の町奉行支配組頭を任命されます。

次々と要所に配属され、責任もある環境の中、多忙な日々の中でも、良太夫は新しい日本の時代について常に考えており、因習打破、人材登用を説いた『政務要論』や、国防策を論じ海軍計画の一般を述べた『戦策の論』の2書を執筆するなど、武術に留まらず、国防先進のために様々な策を論じていたことが窺えます。

大政奉還 明治維新へ

慶応3年10月。徳川幕府は朝廷に大政奉還をします。15代将軍 徳川慶喜が京都の二条城から大阪城に移るにあたり、良太夫は別手組頭取を命ぜられ、取締の任務にあたりました。

翌年1月。鳥羽・伏見の戦いにより、幕府軍は敗北。慶喜が江戸へ戻ると共に、良太夫もまた別手組50人を率いて江戸へ引き上げることになりました。

江戸城は勝海舟と西郷隆盛との会見の末、無血開城となり、江戸は戦禍を免れました。隠退をすることになった慶喜は、わずかな家臣を従えて水戸へと下ります。このとき良太夫は、腕の立つ同士を数名連れて密かに慶喜の護衛の任にあたりました。

同志を集め、万事に備える

水戸から戻った良太夫は、自分の屋敷に同志を集めました。かつて神奈川定番役であった伊庭道場の有志や別手組の面々をはじめ、賛同し集った浪士の数は300名余りを数えました。一方、上野には彰義隊が結集し、新政府との戦に備える動きがありました。良太夫の元に集まった者達は、彰義隊と共に戦うことを期待しましたが、良太夫は「諸士を集めたのは官軍と戦うためではない。徳川家の御家督が定まり、城地の沙汰を待って上様を守護申し上げるためである」と配下達を押さえます。

吉岡家を継いでからは、動乱の幕末を自らの力で身を起こし、旗本に上がり将軍の身近く立つ立場になった良太夫。幕府は解体しても、あくまで“徳川家”の行く末を見定める忠義一徹の幕臣となっていました。

徳川の行く末

慶喜は隠居し、徳川家の嗣子を徳川亀之助とすることは決定していましたが、その後、新政府から徳川家へ正式な処分が下されました。亀之助を、駿河国府中城主とし、その領地高は70万石、ただし駿河国一円の外遠江・陸奥両国に限る。という内容でした。

江戸城を明け渡し、わずかな領地だけ残し、取り上げられる沙汰に、幕臣一同は呆然とします。彰義隊に加勢せず辛抱し、徳川家の行く末を見守ってきた良太夫も、新政府の仕打ちに強い遺憾を持ち、ついには官軍と戦う決意をします。

意を決し、かつての同僚、幕府軍艦の海軍副総裁榎本武揚のもとを訪ね、江戸城奪還・官軍一掃のための策を提案し、共に戦おうと説得を試みる良太夫でしたが、恭順派の榎本と良太夫の意見は噛み合いませんでした。徳川への忠誠心は同じであっても、手段と行動に相違があった2人は袂を分かちました。

法名「徳順」を名乗る

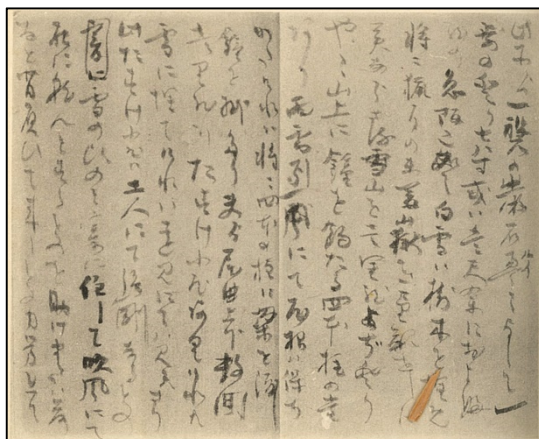
榎本と別れた良太夫は、官軍との一戦に備え、同志の再結成を画策しますが、上野の彰義隊が破れ、旧幕臣の士気も落ちるなか、集まったのは数百名程度に留まり、隊の再結成を実現することは叶いませんでした。それどころか配下の中には、良太夫の意に背き、市中で暴れまわり無法な行いをするものがいて、理不尽な配下の責を負われた良太夫は追われる身となります。縁を頼り、良太夫は浅草の東光院に身を隠すことになりました。今後の良太夫の身を案じた住職は、法弟(修行弟子)になるよう勧め、良太夫は剃髪し名を徳順と改めました。明治元年12月21日のことでした。

奥州の旅へ

明治には、江戸城は薩摩軍のものとなり、大成は天皇の親政となりました。しかし依然としていわれない罪に追われ、良太夫は日陰の身にありました。

明治2年2月、良太夫は僧衣に身を包み、行脚僧となって、奥州旅行に出向きます。旅は約60日余りで、水戸から奥羽路をめぐり、塩釜、酒田、山形を通り、米沢、会津、白川(河)を経ての旅でした。旅中は「奥州日記」と名付けた日記に旅の道筋や旅先での出来事を書き記しています。

水戸街道から奥州白川に抜ける途中、磐城国中石井村の生家鈴木家に立ち寄りたいたいという思いはありましたが、追われる身でそれも叶わず、災いが親族に及ぶことを恐れ、心を断たれる思いで生家を拝み、文のみ届け旅路を急いだとあります。

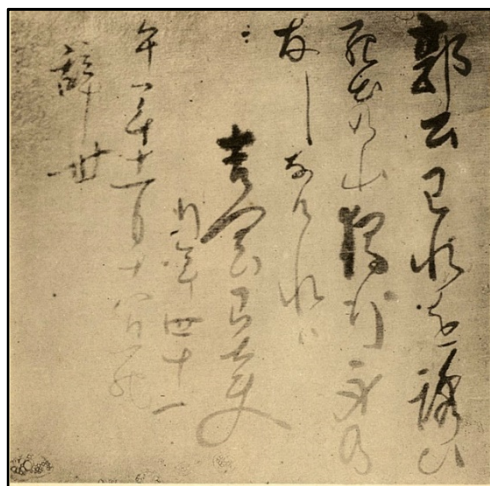


自筆「奥州日記」の一部

辞世の句

奥州旅行から戻り、翌年明治3年にも再度奥州の旅へ出た良太夫は、帰京してのち、部下の罪を一身に受ける形で断罪を受けその生涯を閉じました。明治3年11月18日。享年41歳。一片の懐紙に、達筆に書かれた辞世の句を遺しています。

郭公(ホトギス) 我をいざなへ死出の山 ひとり行く身の友しなければ



辞世の句

徳川家に忠義を尽くす幕臣一徹の志を貫き、良太夫はその波乱の生涯を終えました。

没後は東光院の墓地に埋葬されましたが、のちに吉岡家の菩提寺にあたる文京区白山の心光寺の墓地に改装されました。その墓石には、「吉岡先生之墓」「徳順院儘致秋居士」と刻まれています。

【主要参考文献】

吉岡 良太夫・小島 長蔵 1919『吉岡良太夫小傳(増訂版)』小島 長蔵

山口 安二 『事実物語 吉岡良太夫伝』日刊木材新聞

山田 茂 1985『咸臨丸・吉岡良太夫伝』棚倉史談 第7号